

◇これからの放送予定◇

第540回 2月27日放送

思い出の名場面・アンコール特集その1
司会 山本直純/マリ・クリスチーナ
演奏 新日本フィルハーモニー交響楽団
曲目 ヴィバルディ「合奏協奏曲ト短調2番」
ドボルザーク「新世界より」フィナーレ

第541回 3月6日放送

思い出の名場面・アンコール特集その2
司会 山本直純/マリ・クリスチーナ
演奏 新日本フィルハーモニー交響楽団
曲目 モーツァルト「コンチェルト・ロンド」

第542回 3月13日放送

思い出の名場面・アンコール特集その3
司会 山本直純/マリ・クリスチーナ
演奏 新日本フィルハーモニー交響楽団
曲目 モーツァルト「魔笛」より「アリア」

スポンサーから一言

インテリアにマッチした

電話はいかが

外国映画を見ると実にイキ
なデザインの電話機がでて
きます。デパートなどで購
入したインテリア電話機で
も、認定マークのある製品
なら、電話局へ届けるだけ
で使用OK!

これからは、インテリアに
合わせて自由に電話機を選
べるなんて楽しくなります
ね。

すべての道を手におさめたい

スバルは、早くから4WDの可
能性に着目しています。ドライ
バーが、現在手にし得る最も進
んだ、最も手ぬきのない、どんな
状況のもとでも速く確実に走り
きる車を創る、そんなポリシー
に憑かれたスバルの現在の答え
がレオーネ4WDターボです。

他の車では真似のできない走
りと、しかも止まることに優れ
た4WDメカニズム。そして初体
験のドライバーでも乗った瞬間
から、潜在ポテンシャルの一端
に触れることのできるハイグ
レードなイージードライブ性。

すべての道を、しなやかに安
全に手におさめます。レオー
ネ4WD、速く確実に走る4WD。

あると便利ですね。
2階にも電話。



1本の電話が2-3台で使える
ホームテレホンF
*お問い合わせはお近くの電話局へ。

電電公社

SUBARU

4WDターボ誕生。
劇的に高速4WDツアラー。圧巻のオールラウンダー。

未踏の走りテクノロジー
LEONE 4WD TURBO

中央スバル自動車株式会社
☎ (03) 448-4411

東京スバル自動車株式会社
☎ (03) 814-7111

富士重工

Photo: レオーネ4WDターボAT4セダン1.8L(アルミホイールはオプション)

オーケストラが やって来た

- 司会 山本直純/マリ・クリスチーナ
- ゲスト 小澤征爾(指揮)
- 藤原真理(チェロ)
- 数住岸子(ヴァイオリン)
- 新日本フィルハーモニー交響楽団
- 演奏 齋藤 勉
- 総合司会 東京放送
- 主催 電電公社
- 提供 富士重工

小澤征爾シリーズI

第543回 3月20日放送
 —ブラームス 最後のコンチェルト(仮題)—
 指揮 小澤征爾
 ヴァイオリン 数住岸子 チェロ 藤原真理
 演奏 新日本フィルハーモニー交響楽団
 曲目 ブラームス作曲
 「ヴァイオリンとチェロのための二重協奏曲」
 op102・第一楽章

今年、ブラームス(1833~1897)の生誕150年の記念すべき年にあたります。当番組ではこれまで、ブラームスの4つの交響曲やピアノ、ヴァイオリンの協奏曲はすでに何度も取り上げていますが、ブラームスの生涯最後の協奏曲であるこの二重協奏曲をとりあげたことはありませんでした。それは、この曲が単なる協奏曲を超えて、二人の独奏名手とオーケストラの作り上げる協奏交響曲といっても過言ではない骨格を持ち、容易に演奏し得ない難曲であるからです。優れた独奏者を必要とするこの曲は、ブラームスの祖国であるドイツでも、現在は、なかなか演奏されていません。今日、ここに小澤征爾氏指揮の下、若手実力派、二人の女性ソリスト、藤原真理さん、数住岸子さんの演奏は、注目すべきものがあります。

小澤征爾シリーズII

第544回 3月27日放送
 —告別は別れの言葉ではなく…(仮題)—
 指揮 小澤征爾
 演奏 新日本フィルハーモニー交響楽団
 曲目 ハイドン作曲
 交響曲第45「告別」嬰へ短調
 1・3・4・5楽章

ハイドンの交響曲45番「告別」は、ハイドン(交響曲の父)が書いた104曲の交響曲のなかで、もっとも異色です。作品の内容は、けっして特別にすぐれたというべきものではありませんが、嬰へ短調という調性がこの一曲にしかない(しかも交響曲だけでなく、他のジャンルにもわずかに2曲しかない)という音楽上の特殊性と、風変わりな終楽章とこれにからむ逸話によって有名になったものです。

1772年の夏のこと。当時のオーケストラのスポンサーであったエステルハージー公は、避暑地に居て、例年より2ヵ月も長く楽団を引きとどめようとしていました。楽長であったパパ・ハイドンは団員一同に代わり策をめぐらし、風刺めいた音楽をもって遠回りに公爵を動かしてみることになりました。その目的のもとに書かれたのが嘆願書ならぬこの交響曲だったのです。

◆小澤征爾◆

1935年、中国のシャンヤン(旧、奉天)で生まれた小澤征爾は、子供時代から西洋、東洋音楽を学び、後に、桐朋学園大学音楽科を、作曲、指揮いずれも首席で卒業した。1959年秋、フランスのブサンソンで行なわれたオーケストラ指揮者国際コンクールで、第1位を獲得した。当時ボストン響の音楽監督であり、このコンクールの審査員であったシャルル・ミュンシュが彼を翌夏のタングルウッドに招いたのであるが、そこで小澤は、パークシャー・ミュージック・センターの最高位賞、優秀な学生指揮者に贈られるクーセヴィツキー賞を獲得したのであった。

西ベルリンで、ヘルベルト・フォン・カラヤンに師事していた小澤征爾は、レナード・バーンスタインの目にとまり、1961年春に行なわれたニューヨーク・フィルハーモニックの日本公演に参加した。彼は、1961/62年のシーズンに、このオーケストラの副指揮者になった。彼の北米におけるオーケストラ指揮者としてのデビューは、1962年1月、サンフランシスコ交響楽団を指揮した時であった。彼は、1964年の夏から5年にわたる夏の間、シカゴ交響楽団のラヴィニア・フェスティバルの音楽監督、トロント交響楽団では、4シーズンにわたって音楽監督を務めたが、欧米の数多くのオーケストラを客演指揮するために、1968/69年のシーズンの終わりに、彼は、この地位から去った。

小澤征爾は、1968年1月に初めて、シンフォニー・ホールにおいてボストン響を指揮した。彼は、これより以前、過去4回の夏、タングルウッドでこの



オーケストラと共演していた。タングルウッドにおいて、彼は、1970年に、芸術監督に就任した。その年の12月には、彼は、サンフランシスコ交響楽団の指揮者、兼、音楽監督として、就任シーズンを始めた。1973年に、ボストン響の音楽監督の地位を得た小澤征爾は、1976年春に、サンフランシスコの地位を退いたが、1976/77年シーズンには、この音楽アドヴァイザーを務めた。

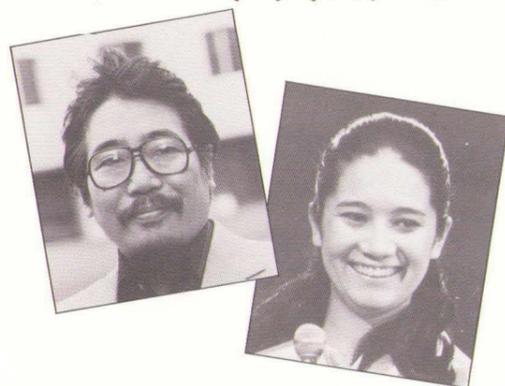
ボストン交響楽団の音楽監督として、小澤征爾は、アメリカ国内はもとより、1976年のBSOのヨーロッパ公演、及び1978年3月に行なわれた日本公演によって国際的にオーケストラの評判を高めた。

その後、中国政府の招待により、小澤征爾は北京中央楽団と一週間にわたり活動し、1年後の1979年3月にはボ

ストン交響楽団を率いて再度訪中し、コンサート活動に加え、指導、研究、中国人聴衆とのディスカッション・セッションを含む、意義の大きな音楽・文化交流を果たしたのであった。又、同じ年1979年に小澤征爾はオーケストラを率い、ヨーロッパを訪れたが、この公演旅行は、重要な音楽祭にのみ出演したということで前例の無いものであった。

また、1981年3月、小澤征爾率いるボストン響は、創立百年を記念して、アメリカ14都市公演旅行を果たしたが、これは17年ぶりの大陸横断旅行となった。同年秋、同様に創立百周年を記念して、小澤征爾とオーケストラは、日本、フランス、ドイツ、オーストリア、イギリスを回る世界旅行に出かけ、各地で大成功を収めた。

司会 山本直純
 マリ・クリスチーナ



◆藤原真理◆

大阪生まれ。7歳より日比野忠孝氏に師事。1959年桐朋学園「子供のための音楽教室」入学。以後15年間、故斎藤秀雄氏に師事。64年、桐朋学園高校音楽科入学。71年第40回音楽コンクール・チェロ部門第1位大賞受賞。72年桐朋学園大学卒業。卒業後4年間、同大学の弦音科講師を務める。74年民音室内楽コンクールで桐五重奏団の一員として第2位、特別賞「斎藤秀雄賞」受賞。75年、昭和50年度芸術選奨文部大臣新人賞受賞。76年フルニエ及びロストロポーヴィチ両氏に師事。78年第6回チャイコフスキー国際コンクール第2位受賞。81年、「ブラハの春」「ドレスデン」「バルセロナ・パラモス」と各国際音楽祭に出演。現在わが国第一線のチェリストとして活躍中。



◆数住岸子◆

福岡生まれ。1961年より福岡音楽教室に入室。天野晴司、故斎藤秀雄両氏に師事。65年桐朋学園「子供のための音楽教室」に転入。前橋汀子、江藤俊哉、海野義雄の各氏に師事。70年桐朋学園高校音楽科を経て同大学音楽部に入学。71年、アメリカ、ジュリアード音楽院の全額スカラシップを受けて留学。同音楽院ではドロシーディレー、アレキサンダー・シュナイダーの両氏に師事。同年、カーネギーホールにてデビュー。その後、アメリカ各地でソリストとして交響楽団と協演、室内合奏団で目ざましい活躍。79年には、アメリカで外国人としては初めての「Affiliate Artist」に選ばれている。

